

## 砂漠の花咲き揃う

——百合子、たい子、「革命的な結婚」について——

マレー 望

「プロレタリア文学」の著名な「女流作家」として、中條百合子<sup>①</sup>と平林たい子は名前を連ねる。明治後期に六歳離れて生まれてから二人とも若くして才を認められ、判断の誤った初婚をして大きな文学材料を得てから離婚して、左翼運動にはまりそこで再婚し、戦中投獄され死にかけて、戦後再開花してそれから早めに他界する、というふうに列挙すれば酷似した人生を二人は歩んだ。しかしよく見れば、根本的なところで大きな違いが見えてくる。

たい子にも百合子にも、戦前戦中は試練の多い時期となった。体力気力の限界を試されたことで却って重要な作品が生まれてきた。そのときの二人のテーマは、著作のほか、思想的活動と結婚であった。二つの問題の重なり方から、左翼運動に関わった女性たちに女性としてどんな生き方が要求されたか、二人がそういう要求にどう応えて行ったかを探ってみたい。

### 一

一九二七年の平林たい子は、同棲歴に既に四人の男が数えられた。生まれ故郷の諏訪から上京、活動、大震災の際の拘置、渡満、出産、赤子の死、帰京してからのリヤクと大衆小説に支えられた生活すべて経験済みの二十二歳である。

砂漠の花咲き揃う

不安定な生活を強いる無責任な男たちにそろそろ飽きてきた。ちょうどその頃発足した「文藝戦線」の新鋭作家として認められ出していたたい子は、編集者の山田清三郎に世話してもらい、活動家・小堀甚二と結婚することになった。

九州の貧困育ちをして、肉体労働と独学で生きてきた小堀はたい子より四歳上だった。彼とたい子は惚れ合ったとは言えないが、互いに何かを見出して結婚に挑んだ。それはどうしても「恋愛」「ロマンス」ではなかったにしろ、様々な共通体験を通してがっちりした絆を二人の間で造り上げた。

たい子と小堀は、文字どおり「文藝戦線」によって結ばれた。五年後、中條百合子も共産党の若きリーダー格宮本顕治との再婚を思想の関係、つまり彼女の入党とソ連滞在の影響から得ることになる。

百合子は一九二七年から一九三〇年の間を、ヨーロッパ旅行を挟んで恋人湯浅芳子とともにソ連で過ごしてきた。その時期から彼女には結婚、妻の座と伝統的な女の役割を思想化する傾向が強まっていた。ソ連を扱った小説や随筆の多くは共産主義国での「婦人の現状」などを詳しく語り、日本や西洋の場合と比較対照している。「子供・子供・子供のモスクワ」で、病院で世話してもらった「身持ちの看護婦さん」ターニヤの輝く様が描かれている。ターニヤは幸せな結婚生活を営みながら、妊娠

八九

中でも人のために働き続け、おまけにモスクワ大学の労働科で夜学を頑張っている。「—どう？ あんたにはやはり通す自信がある？ そういう体で昼間働いて、夜また勉強する、時々辛いことあるんでしょう。—何ともありません。辛いと思っただことは一遍だつてない」。ソ連滞在を小説にした『道標』に出てくるアンナ・シーモヴァという婦人幹部も、同じく労働者と妻と母親とを合わせている。『道標』の主人公で百合子の分身・伸子がアンナ・シーモヴァに対して「歓喜」「清冽な幸福感」「いいわねえ」「立派」「人間らしい人」そしてよく論文にとりあげられる「咲き揃っている」と褒めちぎっている。「わたしも、ああいう風に咲き揃ってみたいと思うわ。あの人たちのように…なんて人間らしいんでしょ、咲きそろおうって」。『ゴリキイヤアンナ・シーモヴァの人間らしさに、完全な性が保たれ、咲き揃っている。そのことを伸子が、美しく感じうらやましいと感じるのは、人間達成の可能のゆたかさへの共感であり、すすみゆく社会の本質が個々の男や女に与える可能性の意味ふかい承認だった」。

伸子は、ソビエト社会が可能にした「まじりけない」女の模範例としてターニャやアンナを見ている。不破哲三の共産主義スラントでいうと、「伸子は、社会主義のもとでおこなわれている結婚、妊娠、赤ん坊の誕生などにたいする社会的な配慮と保障が、(コロンタイ女史が予想したように)家族の消滅ではなく、家族生活の「歓喜」と「清冽な幸福感」をうみだしているところに、自身が体験してきた結婚生活の苦悩とのおどろくべき対比をみ、社会主義の道義的な優位を実感したのでした」。伸子は、共産主義／社会主義と結婚とを互いに必要としているものとして考えるようになる。

黒澤亜里子いわく、「(戦後の百合子の思想では)「父と子と精霊」ではないですが、「母と子とマルクス主義」が結びついて、それが「咲き揃う

女・母・労働者」というアイコンの真理を支える三位一体の教養になっている」。中川成美がこれに応じて、ヘテロセクシズムとマルクス主義の共通性を指摘する。百合子はこのとおり結婚の成功例を共産主義の一部、共産主義を成功する結婚の一部として見るようになった。沼沢和子のいうとおり、「(「青鞥」をかこむ若い婦人たち)の目が「直接周囲の習俗、恋愛、結婚、家庭の問題に向けられ」たことを個人主義的狭さと批判するのは、恋愛、結婚、家庭の在り方にこそ鋭く家父長制的性差別への問題意識を鈍らせる結果」になってしまった。

百合子の場合、共産主義と結婚がほとんど同時に訪れてきて、思想の中にも私生活の中にも不可分の存在となった。二番目の夫(三番目のつれあい)となる宮本顕治を初めて知ったのはおそらくソ連滞在中「改造」に発表された彼の論文「敗北」の文学」を読んだときだった。彼女の帰朝と入党によって、顕治と急接近し一年間活動をともしてから、一九三二年二月に結婚することで家族や同志に大変なショックを与えた。(百合子のする結婚はとにかく思いがけない相手と急なタイミングでおこなわれるに限っていた。)彼女三十三歳、彼二十四歳で既に有望な黨員。彼との結婚、共産主義への入信とは切っても切れぬ縁だった。ずっと後で、一九四四年に顕治の公判を傍聴し転向をきっぱり拒む彼の凛とした姿に心打たれ、百合子は日記に書く。「私たちは、というより、自分はこうして一段と彼の妻となった」(一九四四年十月二十五日)。

「文藝戦線」のグループによって結ばれたたい子と小堀は、一九三〇年に相次いで脱退することになった。思想的に二人で孤立して、互いの絆をさらにきつく結ぶほかなかった。妥協できない、人に調子が合わせられない、頑固な小堀はどのグループに入っても、すぐ少数派になってしまいが、たい子は力の限り彼の欠陥を補い続けた。

たい子はすでにプロレタリア文学の有力新人として広く認められていた。十代のつらい経験に「文藝戦線」グループの影響がかかって、「嘲る」「なげすてよ!」「治療室にて」「愚かなる女の日記」等傑作を次々と書き上げた。一九三六年にその知名度を買った小堀はたい子に岡山地方の黒田寿夫の選挙応援旅行を頼んだ。そこで若くて人望ある活動家・江田三郎と一緒に郡部をまわって演説することになった。そういう親密な状況下では、面食いのたい子が江田に惚れ込んだのも不思議ではなからう。そのまま、告白するように日記帳から破れた数枚を彼に渡して、東京に逃げ帰った。その出来事を小堀から隠そうとするどころか、さっそく心中のすべてを明かした。この体験が元の小説「エルドラド明るし」では、主人公が地方から夫に送る手紙の内容は「私は恋をしています。雲の上にいるような気持ちです。目も見えない。耳も聞こえない。助けにきてください」である。江田にどんな恋愛感情を抱こうと、小堀との関係を歪ませるも抹消する効果はない。「どうして、自分は、あの人はあの人、自分は自分という生き方ができないのかと考えた」。

その関係には、個人的な気持ちと一緒に、長年同じ政治的・社会的目標に向かって肩を並べて苦労した積み重ねもあった。たい子は連作短編「プロレタリアの星」「プロレタリアの女」でこの共同体験のない夫婦を批判している。たとえば「プロレタリアの星」の石上は、獄中で妻の小枝が生活苦のためもう一人の同志と同棲することになったのを知り、たちまち闘志を失う。「最初に彼から奪われたものは不羈な自信だった。自信は彼の内面生活の、全建築の土台をなすものであった。それが失われた時、忍耐やねばり強さの印刷労働者らしい特徴は脆く崩れた」。石上は男または夫として自尊心を失ってみたら、労働者または闘士として自尊心が持てなくなることに気づく。夫婦愛は彼の思想を強化するのではなく、脆くしてしまふ。

夫と共に戦うのではなく、自活ができなくて近くにいる男にしがみつく小枝は「夫が何を目的に生きているのか、そう深く考えもせずにつれ添う死んで行く」「無数の妻」の一人である。同じ小説に出てくる清子は小枝と対照的な女で、コロンタイ女史の「赤い恋」を読んだりし、しっかりと自らの思想を持っており、恋人と意見が食い違うようになったら別れを思案する。しかし、小枝にしる清子にしる、夫婦（恋人同士）で思想的な結合や互いの社会的尊敬を持ち得ていない。

## 二

小枝のように、左翼活動に関係のある女性の多くには思想的参加ではなく家庭的支援が求められた。たい子の前夫・山本虎三は獄中で彼女においてけぼりを喰らい、「妻である女闘士の最善の途は、良人が鉄窓に繋がれている時「善き妻」であること以外にない、といふことがいへるならば、彼女は、恥づべき闘士ではなかったか?」と憤慨する。「女人芸術」の座談会で、お世辞にもフェミニストとはいえない葉山嘉樹は「無産階級が解放されないうちは、婦人解放と云うことは問題に成り得ない」と断言している。近藤（堺）真柄や福永操という女性活動家たちは、男性の同志に同格の人間としてなかなか扱ってもらえなかったことを回想している。殉死を遂げた小林多喜二の「党生活者」のハウスキーパー問題の扱いでは、共産黨員もいかに「古き良き女の美德」の信者だったかが見られる。

山川菊栄は封建制度の名残に諸悪の根源を見出した。「封建的な習慣の結果として、男女は、性的関係より以外に友として同志として相接し、協同の行動をとる機会と習慣とを全く欠いている。：男子もまた、婦人を同じ人間として考える習慣がないので、現在の社会における婦人特殊



の隷属と搾取の形態について、直接自分自身の問題として考えるまでにそれに対して痛切な利害関係を感じ得ない<sup>⑧</sup>。

この背景を考えると、戦時中プロレタリア文学の女性作家の多くが思想を置いて当局の協力者になったのも不思議ではない。迷うのも当然とどうか、「プロレタリア女性」にも「国防婦人」にもよく似たことは要求された。「日本婦人本来の従順、温和、貞淑、忍耐、奉公の美德<sup>⑨</sup>」。

しかも、プロレタリア活動が平等を説きながら女性を妻の役に束縛しようとしたように、戦時体制は女らしさを要求しながら女性に未曾有の自由を可能にした。たい子が書くように「婦人文学者は、競って中国や南方の占領諸島に派遣された。…この場合でも、彼女たちの味わった感激は、戦争という乱世を機会にそれぞれ子供のある家庭を公々然と離れて、何週間も何ヶ月も自由に他人だけの社会で堂々と行動してきたということではあるまいか<sup>⑩</sup>」。戦争で男の役までこなすようになる女の舞台の拡大は様々な研究者が指摘している。

過酷になるばかりの弾圧に屈して、左翼思想を捨てて当局に協力的になる「転向」は戦時の特徴となった。百合子や宮本顕治のように、獄中でどんな非人間的に扱われても転向しなかった数少ない人は戦後英雄視されるようになり、非常に強い道徳的権威を持った。逆にいえば、転向者を批判できる立場だった。百合子は特に、戦中までは親友だった佐多稲子への態度が厳しかった。当時稲子の夫だった窪川鶴次郎は一九四四年に結婚生活の破綻をむかえ、百合子に「こうこぼした。「こういう生活の根本的破綻は、奥さんがえらくなくなったから、おもいあがっているからだ」。ここでも、稲子（三児の母だった稲子、年老いた継母を抱えていた稲子）の戦争協力は家から公共に出たいがためになされたところがあつた証拠がある。

戦後の「婦人と文学」で百合子は稲子や林芙美子たち女性戦争協力者

を、抵抗する義務よりも女性として何かを達成したい欲求を優先してしまったことについて批判する。一理はあるにはあるが、裕福な家で育ち、工場づとめどころか家事や育児を強制されたことのない百合子には、稲子たちの動機への理解が欠けている。

稲子は特に、百合子のスケープゴートになったようなものだ。百合子は元・親友の稲子こそ激しく責めても、同じく協力した他の女性（義母の宮本美代、もう一人の親友の壺井栄）を責めないばかりか、自分と同一視する。「私達人民一般は、させられた戦争に、理非をも云わせず引き出されたのであつた<sup>⑪</sup>」。百合子は自分のことを投獄された活動家というより、戦中夫を奪われた「兵隊の妻」というふうにみるようになった。戦後傑作の「播州平野」から：「思想犯の妻として、留守暮らしをするひろ子のやや特殊であつた妻としての生活は、いつともなく極めて微妙な相似性で、日本じゅうの、数千数万の妻たちの思いと共通なものとなりはじめた。…何かの意味で眠れない夜々をもたない女は、日本にいないのであつた<sup>⑫</sup>」。小説「播州平野」と同年に書かれた女性史「私たちの建設」では、さらに日本の女性たちを戦争被害者としてとらえる言葉がある。「陸軍や海軍の軍人、教育家、職業紹介所の役人たちは口を揃えて、日本の母親は自覚しなければならぬ、子供を軍需生産へぶちこむことを躊躇してはならない、ということをもっと違つたもつと英雄主義的な言葉で繰り返し繰り返し述べている。…年とつた家の女性たちもやはり涙を抑え、嘆息を笑顔にかえて生きぬいていたのであつた<sup>⑬</sup>」。おそらく宮本美代をおもつて書いたこの文章は、壺井栄が香川の貧しい未亡人棚田キノを取材して書いた「日本の母」の裏面である。キノの六男が兄たちに続いて出征しようとしているところを、「これもまた志願するとして楽しんでおりますけん、おう、ゆけ、ゆけ、ゆけ、いとります」とキノは語る。取材者の栄は「この飾りのない言葉で、私は真正直な「日本の母」を見たような気

がした<sup>⑨</sup>と感嘆している。褒めるか憂うかはともかく、百合子も栄もキノや美代のような女性を尊敬のまなざしで見ている。

宮本美代の百合子への影響についての研究はやや不足しているが、沼沢和子が重要な説を提起している。「処女作「貧しき人々の群」では貧しき人々の友になりたい、貧しき人々と自分との間の溝を埋めたい、という素朴にして熱烈な善意をもって出発した百合子。「伸子」を生み出す過程で、人間らしくたつぷりと生きたいという自分の願いが、大それた度はずれたものに見えるほど、不自由な日本の女たちの現実に目覚まされた百合子。日本の女の一人としての自分を真に解放するためにも、貧しき人々との溝を埋め、ともに人間らしく生きられる社会を求めてマルキシズムに共鳴し、プロレタリア文学運動に飛び込んだ百合子。そしてその運動の中に出会い、同志的な結婚をした夫の家族に、「うちの者」として迎え入れられている百合子<sup>⑩</sup>。

百合子が初めて山口県島田（現・光市）にある顕治の実家を訪れたのは一九三七年の春。そこから獄中の顕治に宛てた手紙は沼沢の「貧しき人々への憧れ」説を裏付けるだけではなく、百合子が当時如何に女性の自分を意識していたかを悲しくいらい物語る。「お后や、一寸来て」お父様はお后様なしでは立ちゆかぬ有り様で、又お母さんが、明るく、ときばきと、優しくしてあげていらつしやる様子というものは実に見ものです。美しいというべき眺めです」（一九三七年三月二十七日）<sup>⑪</sup>。「伸子」時代に得た結婚の微妙さの認識がすっかり消えて、義母・美代の「女らしい」美德への無条件な賞賛一筋だ。その後、近所に顔合わせするために美代と散歩に出かけた。「良い日和でございます。あの、これが顕治の嫁でございます。どうかよろしく」おじぎをする私は大変お嫁のような気がいたしました」（一九三七年四月十日）。これでは、二十歳で荒木茂と結婚をしたときにそっくり逆戻りしたようなのである。

砂漠の花咲き揃う

かわいげがないわけでもないが、問題は、「お嫁」気分がいつのまに百合子が稲子に毛嫌いだした戦争協力まで滑らせているのに百合子が気づかなかったことにある。顕治の弟たちが出征して行くたびに百合子は山口まで来て美代たちを支えたが、そこから顕治に書いた手紙はまるでそこらへんの村の嫁が出征中の夫に書いてもおかしくないようなくだりがある。「うちは出征家族ですから特別の便宜があつて不自由して居りません。お母さんも二人いよいよ出しておやりになって、心配はあるが希望も十分もつていらつしやるから何よりです。きのうのかえりの汽車の中では、私も何とも云えない心持になって、もしやお母さん涙をおこぼしに成りはしまいかと気づかいましたが、窓のところに舷をかけて、何か小聲で歌をうたつていらつしやいました、軍歌の切れを。そしたら私の方が、唇が震えて来るようでした」（一九三九年四月十七日）。

戦後、この自分がある程度顧みることになった。「日本の婦人が封建的な習慣をもつていて、自分の感情を披瀝することを憚ったり、道理を公然と主張することを遠慮したりする習慣も、戦時中女性の愛情からの声を抑える結果になって、それは戦争を遂行するためには実に有効に利用されたのであつた。私達は日本の社会のそれほどに根深い封建制と、それに慣らされた、自分達女性が、愛を守る智慧さえもなく、女の命と言われる愛情への権利さえも放擲してきたことについて、涙をこぼすというよりもっと無念さを感じるのである」<sup>⑫</sup>。百合子が、この線をもっと追求していくことができたなら……。

百合子の手紙では、いかに左翼活動家としての自分の声も、女性作家としての自分の独立した考え方も（つまり、中條百合子というアイデンティティ全体）すすんで抑えてしまったかが明らかにしている。代わりに、宮本家の長男の嫁の役におさまった。沼沢いわく、百合子と生母・中條葎江がいつも考えていることをすべて出して喧嘩し続けたのに、「島田

「宮本家の在処」の人々の前では言葉を失ったようにみえる<sup>23</sup>。

一九二一年の日記で「荒木は、私をデベロップするために生れた」と書く百合子は、さすがに「自己肯定的」と言われるだけあつたし、前夫荒木茂（そしたその後妻きよと二人の娘）には申し訳ないが、ある意味ではまさに百合子の書く通りである。荒木と出会い、結婚して、そしてやがて離婚を選んだ過程は女性として作家として百合子を展開させた。同じく、湯浅芳子との長い共同生活は普遍的な男女の二元性を越えたところからの観点を百合子に提供し、また違う意味での精神的成長を促した。しかし、宮本顕治との結婚の場合、戦時体制が彼に獄中の英雄、彼女に無条件に忠実な妻というめいめいの役割を強いた。それで百合子の精神的成長が止まってしまった、あるいは歪んでしまった。顕治への完璧な忠実や愛から一歩でも道を外れることは、彼を裏切り彼が体現した共産主義を裏切ることに等しいと百合子は考えた。だから、「伸子」時代の日記を創った苦しくて綿密な自己分析も、芳子に宛てた書簡の広さ多彩さをつくったあらゆる未来への展望も、顕治との関係には許されなかった。

生活だけではなく、仕事にも、内面の分析が共産主義・顕治への傾倒、「夫の価値観・まなざしを内面化し、それをもって自らを監視し律しようとする行為<sup>24</sup>」に変わったところで変化が生じた。執筆が二十年間を隔てているのに、「二つの庭」や「道標」は「伸子」より目立つ成長を示さない。巨大紀行文の「道標」は劣っているとまでいえよう。戦後の百合子は過去を繰り返すも、新しいことを学ばない。なぜなら、既に物語の終わりをわかっており、学ぶべきことはすべて学んでいると信じ込んでいるからである。

湯浅芳子との出会いに触発されて「伸子」を書き出したときは、終わりをまだ生きてはいなかった。書く過程自体が終わりを教えてくれた。「二つの庭」や「道標」は既に終わりがわかりきっている。向かっている

ところは、百合子の急死によって書かずじまいになった「春のある冬」と「十二年」という長編であろう。（どこまでも伸びる「伸子」から、道のある冬」の示す「道標」、さらに未来と時間帯に限りを与えられている「春のある冬」「十二年」へと行く過程を題名自体に見出すことはできるであろう。）

「文学について」というエッセーで百合子が綴ったその書かずじまいの小説の概要は、政治事件の連発で生きた小説というより党のプロパガンダに聞こえてしまう。また「道標」を書き終えてで、「わたしは、「伸子」につづく「二つの庭」や「道標」およびこれから書かれる部分を、自分のものとは思っていない。きょうを生きるみんなのものであらせなければならぬと思っている」。思い上がり謙遜の間で微妙に揺れる文章だ。黒澤重里子は、戦前に比べて戦後の百合子作品の「当事者性をおびた視線の構造<sup>25</sup>」の欠如を指摘するとき、こういうことをも言っているのではないか。

百合子の死後、野上弥生子や湯浅芳子は「中條百合子」から「宮本百合子」の筆名変更にも顕治の百合子の生活全般への影響を見出している。筆名は作家の自分にとって大事なものだど踏ん張った百合子が、顕治の言下の威圧によくやく折れた結果だった。池田啓悟の分析では「（顕治は）まず封建的な状態があり、それに対立する個人主義的な独立が来て、その上でより高い統一があるという進歩・発展の図式を描き、自分の改姓の提案を一番高い段階に位置づけ、百合子の反発はこの高い段階での統一と封建的な従属とを混同している、としている。そして百合子もまたこの図式を取り入れ、自らの感情を「古いものの投影」として切り捨てたのである。（中略）二人のやりとりは、相互の主張を取り入れた双方向的なものではなく、顕治が一方的に自分の論理の中に百合子の主張を位置づけていく作業でしかなかった。それは百合子にとっても、顕治の示した図式と自らの感情を突き合わせて新しい視点を切りひらくものではな



く、相手の枠組みに従属していく過程であった<sup>⑦</sup>。

皮肉なことに、百合子が顕治に支配されてゆく過程は共産主義がたどってしまった道と似てなくもない。同じく池田（二〇〇六）によると「支配階級が「被抑圧者の前衛」である限り、そこにずれは存在しないはずだった。だがイデオロギーを共有するということは、結局は統治する側とされる側の一致が、実は統治される側がする側の理論を自ら取り込んでいるだけなのではないか。もしそこにずれが生じたら、統治される側がする側にあわせていく以外に道はない。∴支配する側とされる側が完全に一体であるから正しさが前提とされ、本当にそれは正しいのかという支配される側からの問いかけは閉ざされてしまう<sup>⑧</sup>。百合子と顕治は「一体」となったところで、顕治の「正しさ」が絶対となり、百合子はそれにあわせるしか道はなかった。例えば「風知草」で、主人公ひろ子は夫の重吉に、たまに批判しても絶対に支持している、とわからせようとする。ところが、重吉はそれを一切受け入れず、批判が許されていない自分の「絶対的支持」の定義をひろ子に押し付ける。（彼の方が彼女を「絶対的に支持」する概念はないらしい）。

### 三

ある意味で、戦時中のたい子と小堀の間にこそそういう「絶対な支持」が存在しており、一九三七年に別々に検挙されたときに二人を転向から守った。二人とも十年間の結婚生活の間に、既に思想的にも感情的にも自尊心への様々な攻撃を乗り越えて、信頼と対等を得て、特高警察くらいで怯むものではなかった。たい子は「こういう女」で、検挙直前の二人をこう描写する。「居るべき者が居るべき所にいる満足から、朝の寢覚も果実が熟して自然に口をあけるような自然さだった。そして、同じよ

砂漠の花咲き揃う

うに爽やかな眼覚を覚えているらしい夫に、「ああああ、ずいぶん時間の浪費をしましたね。もうかれこれ、今年も大半終わってしまった。勉強勉強」と声をかけると、「ほんとになあ。俺にはよい人生勉強だったが、お前には気の毒した。この取り返しには大馬力をかけなくっちゃ」と快く私の言葉にひびきかえす答えがあった<sup>⑨</sup>。カロリン・ハイルブルンいわく「人間関係は弾みがあり、変化し展開し、もつとも結びの強い点への向かう傾向がある<sup>⑩</sup>」。戦時中はたい子と小堀にとってその「もつとも結びの強い」時代だった。小堀の自伝小説から：「長い年月の起伏の多かつた二人の生活からは、単なる夫婦以上の結合が生まれた<sup>⑪</sup>」。

一九三〇年代にもなれば、「妻は、家において夫を守るだけのつましきものに還元されてしまって、昔の習慣をそのままの、いし子のような型の女は何となく度外れて目立つようになった<sup>⑫</sup>」。時代の流れも、たい子と小堀の流れも、加速して変遷していた。「上官の来着で室中の者が木像のように硬くなる一瞬、私は立ち上がってこの検束者の妻である身分を言いながら何かの機先を制すように腰を折ってお辞儀をした。∴「およそ小学校以来、これだけ無意味な体操をしたことがあるだろうか」という嘲りの一方では検束者の妻が心配してついて来ているということでも相手に何かの心理的な負担を呉れてやろうという目ろみで一所懸命だった<sup>⑬</sup>」。「私達のような女にとって、平凡な妻であることは、非凡な妻であることよりも至難だった。しかし、彼がそんなにも求めているならばつとめてなれないこともなからうではあるまいか。よし、なつてもみせよう、その平凡な妻に<sup>⑭</sup>」。たい子のアプローチは、夫が決めた形に自分を無理矢理はめるといふよりも、自分と夫とのニーズに適応していくようなものだといえなくもない。

二人の結婚生活を扱う小堀の小説の最も魅力のある一節は一九三七年にたい子が捕まり、彼も自首して同じ警察署で拘置されていた時を語る。

「留置場の扉があげられた。扉の外で鶴代が出て来るのを待っていたのは、鼻の垂れ下がった陰険な感じの所轄署特高係の一人だった。扉を出る一步前の鶴代に、このお伽噺の魔法使いの老婆のような鼻をした特高係が覆いかぶさるようにして何かひとこといった。するとびっくりしたように、鶴代が佇立した。そして先陣館の盛綱のように、顔を振り仰いで右手の甲で涙を拭いた。：鶴代が釈放されるのではなくて他署に廻されるのだと直感した坂井は、無意識に立ち上がっていた。「身体に気をつけろ！」看守の存在を無視して、坂井は留置場内にひびき渡る大声で叫んだ。それを聞いた鶴代は壁の方にくると向いて留置人や看守の視線を避け、す早く着物の前をまくってはいた婦人用の毛のスボン下を脱いだ。そしてそれをまるめて、坂井に渡してくれるよう看守に託した。：鶴代は夫の坂井が氷の洞窟のような留置場でズボン下をはいていないのに心を傷めていたものだろう。あるいは再会の日があるかないか分からない坂井への形見の積もりだったかも知れない」。ここで、小堀とたい子との同じ留置人という平等な社会的地位、互いへの集中したまなざし、大勢の眼前だというのにインテリメートなやりとりができるほどの身体的行き交いがすべて見てとれる。

たい子も小堀も、百合子や顕治ほど拘置の時間は長くなかった。百合子同様、たい子は重体になり釈放されたが、一九四〇年代前半までは寝たきりの彼女を、責任を感じた小堀が献身的に看病して養った。途中で、翻訳業の過労と栄養失調のため、彼の左目は失明した。

たい子の長患いのせいで、一つの「妻の役」をこなすことが数年間の間不可能だった。「わたしは生きる」という短編は、自力ではまったく動けない彼女と、目を悪くしている彼が性的な一部をまざったテンションを高めつつ一緒に奈落の底の住人となっている。「俺は神様じゃないんだぞ。一体お前の考えでは俺はどうすればよいと思うか言ってみろ」：

仕方がないわ。生きたいもの」。やがて、夫に「俺の目はこんなになつたが、お前は生かしてやるぞ。生きたいか。この生きたがり屋！」と言われて、「うんうん」と私はうなずいて、やっぱりもう涙を出していた。小堀がたい子の生きたい渴望を受け入れ、たい子が小堀の肉体的欲求を理解する。しかも、江田三郎事件と同じく、一人だけの秘密にさせず、二人の関係そのもの一部にする。「我が夫は神にあらねば折ふしは女遊びさすや汚れ衣きて／いとせめてスフの下帯かへて行け遊里は衣のもの言ふところ」。

たい子と小堀こそ、一時だけは「一体」に成り得たのであろうか。「こういう女」のクライマックスでたい子が夫の姿に十五年前に生まれてはほどなく死んだ我が子の幻を重ねて見る。「私は、今のこの瞬間、あの夫とその子供の幻とを一緒にして、「夫は私の生んだその子供なのだ」と思うのに、何の躊躇も矛盾もなかった」。一瞬の思い込みに過ぎないにしても、二人がどれほど互いの人生の中心にいるか、どれだけ強い（性的な意味ではなく）肉体的絆が紡がれていたかを物語っている。

しかし結局は長続きしなかった。治安維持法の足枷から解放された戦後は、小堀が活動に、たい子が創作に取りかかり直した。一九四六年に二人は小堀の姪・新子を養女にした。たい子が戦中筆をとれなかった分、溢れ出るように小説を書き始めて、大繁盛した。小堀の方は相変わらず少数派で泣き寝入りが多かった。たい子は彼に空しい援護をするのにも飽きてきていたし、例によって美男子に惹かれたりした。小堀もまた、講演や取材旅行、委員会の仕事などでしょっちゅう家をあけていたたい子に愛想を尽かして、女中の下村清寿と関係を結んだ。二人の間に民子という娘が生まれた。清寿と民子は五年間ひっそりと暮らしたが、就学のために戸籍が必要となったときに、小堀はたい子にもう一つの家族の



存在を告白した。「たちまち、机上にあった呼鈴が夫の横顔に飛んだ」。

ついに二人は離婚することになった。十五歳だった娘の新子は定期的に二人の家を歩き来して暮らした。「私は子どもに小堀の状態をよく尋ねた。子どもは向こうの様子を言いたがらなかった。「言ったっていいじゃないの」と私がなじると、「お父さんも同じことをきくんですもの。そしてあたしがプリプリしていいわいない」と向こうもプリプリしているのよ」と答えた。同じことを両方でやられるからかなわな、というのだった。二人とも気になってしかたがなかったらしい。

たい子と小堀は、結婚の三十年間をほとんど喧嘩しっぱなしで過ごした。互いに傷つけ合い、憎み合い、公的仕事や活動と同じくらい真剣に相手への理解に取り組んだ。それで、痛々しい、荒削りの平等を二人で造り上げた。

#### 四

戦争と戦後は百合子の結婚をたい子の体験と逆向きにさせた。アース・レグインの冗談ならぬ冗談で「私の印象では、結婚相手が誰だったとしても、トルストイはその女性のことをある面だけでしか尊敬せず、そのくせ彼女には自分をあらゆる面で尊敬することを要求していただろう」<sup>④</sup>。これは、戦後の百合子と顕治の関係をいやというほど言い当てている。「十二年の手紙」をとっても「風知草」をとっても、顕治の年々強まる支配が明確に見える。「風知草」の男性中心の家庭風景を相対化する目が作中に装置されていないこと、それらは、波瀾の十二年に培われた作者自身の心性を正確に反映したものと一言わざるをえない<sup>⑤</sup>。不破哲三は百合子の十二年間の「不断の成長、脱皮をめざす一貫した努力」を褒めるが、これは本物の成長というよりも、顕治が強要する方向に動くこと

だけではあるまいか。

たい子の「プロレタリアの星」で見てきたように、夫の投獄の間で別れ別れになった夫婦は数多かった。「獄窓に隔てられた夫婦においては僅かな疑念や不信も結合の崩壊につながりかねない。だからこそ夫婦間の信頼を保つために細心の注意が払われた」<sup>⑥</sup>。百合子の場合、その信頼の保持は高くついた。顕治への「不断」の信頼、ひろ子のいう「絶対的支持」はより客観的で深い自己分析を不可能にしてしまった。

戦後の顕治に対する百合子の態度は、戦中の国に対する宮本美代や壺井栄たちの態度とそれほど違っているであろうか。戦時の大日本婦人会の綱領はこう始まった。「私供は日本婦人でありませう。神を敬ひ詔を畏み皇国の御為に御奉公いたしませう」<sup>⑦</sup>。ここで「神」を「マルクス」に、「詔」を「あなた」に「皇国」を「党」に換えさえすれば、戦後の百合子の思想が見えてくる。百合子はどうしてそれに気づかなかったのか？ どうして戦時の習慣が顕治に対する態度に影響していることを意識しなかったのか？<sup>⑧</sup>

百合子は稲子たち戦争協力者を、当局に抵抗せずに自分の思想の責任を持たずに、従ってしまったことで責めた。「キャラメル工場から」を書いた窪川稲子、「くれない」を書いた窪川稲子が、侵略戦争のために協力するということは会得出来ないことであった<sup>⑨</sup>。しかし百合子が顕治に抵抗しなかったのは、どうであろうか。「伸子」を書いた中條百合子が、「悪い亭主の見本」のために泣いて従うということは会得出来ない。

渡邊澄子が述べる。「群を抜いて、そしていつまでも佐多稲子が糾弾されるのはなぜだろうか。理由は簡単である。大勢のなかの多くは、できたら抹殺してしまいたい当時の言動になるべく触れまいとし、または抹殺してしまいたいがために自己批判したからそれでよしと乗り越えてしまっているのに、佐多稲子は、いつまでも自責の念に嘖まれ忸怩たる想

いから逃れられずにいるからである。無惨な傷跡を人前に曝すことで責任をとりつづけ、己れのなさけなきに鞭うち続けているからである<sup>⑧</sup>。稲子はきわめて「人間らしい」態度で「責任をとりつづけ」て免罪符を探さなかった。

一方壺井栄は、批判されさえしなかった。栄の戦後作品の中に戦争協力の反省がまったく探し出せないことからすれば、彼女自身が「責任をとるべき」「責任をとる権利がある」という認識がなかったようである。百合子も、ずっと支えの存在だった栄に対して、そういう意識がなかったらしい。

栄の随筆にこのくだりがある。「(戦中)私の五目ずしが百合子さんの好物の一つになったのもこの頃であり、獄中の顕治さんのために百合子さんが自分の手で毛糸の編み棒を握ろうと試みたりしたのもこの頃のことだった。しかし、百合子さんの編み物は大きくは私のお得意でそういう面だけがあんでいた。編み物と五目ずしだけが私のお得意でそういう面だけで発言権をもっている私だった<sup>⑨</sup>」。皮肉なのかストレートなのか、これは栄がどれほど同レベルで見てもらえなかったのかを明らかにしている。

池田は百合子の「小祝の一家」の分析で、顕治と百合子の関係で「政治運動」と「暮しに関する運動」がいかに序列化されてきたかを見せている<sup>⑩</sup>。当然、「暮し」は女性の担当とされがちだった。栄こそその体現だった。そのためか、小林裕子が百合子、稲子、栄の三人の友情の分析でも、栄の戦争協力問題に触れない。戦中も戦後も、誰も気にしなかったのか。

栄は、「女らしい」「暮しの領域」を担当していたからといって戦争協力の責任を免れるべきではなかった。女性性や夫との関係がどうであろうとも、自分の行為の責任を自分で持つ権利・義務を認めるべきだった。同じく「一段と彼の妻となった」ことで、百合子は共産主義や顕治の人

格を、彼女の高い理性の限り客観的に考える権利と義務とを失うべきではなかった。

どれほど失い、顕治のために自分を縛ったかは「風知草」の一読から十分わかる。主人公・ひろ子は驚くほどの露骨さで夫・重吉にいびられるのに、彼の策略にはまり彼の言動のすべてを必死で正しいこととして受け入れようとする。百合子自身が昔湯浅芳子への手紙で書いたように、「賢いはずで、強いはずの女も、自分の良人にはコントロールされてゆく」(一九二四年六月三十日)。そして、芳子への別れの手紙で「(あなたは)何か理性ではない力でべこ(百合子)を制す悪習がある。それにまけるのは、私のこれからの一生の理性の力を否定することになる」(一九三三年二月七日)。

ハイルブルンの言葉で、「力とは、行動に必要な議論に参加する能力と、自分の言い分を認めてもらう権利である<sup>⑪</sup>」。百合子は「行動に必要な議論」を共産主義に定義していたが、それに彼女が選んだ参加の仕方は、思想と顕治との結婚とを一緒にしてしまうことであった。その結果、彼女の「言い分を認めてもらう権利」を失って、あるいは放棄してしまった。またハイルブルンの言葉で、「怒りを表現することも、自分の中に認めることさえも許されなければ、そのまま力も決定権も奪われることになる<sup>⑫</sup>」。政治活動においてこの言葉をよく理解していた百合子は、自らの生き方には応用できなかった。

たい子はしかし、生涯中そういう怒りを認めて表現する権利を手放さなかった。離婚から四年間が経った時、「殴る夫」という文章でこう書いている。「女がめそめそ泣いて男に殴られているべきときに、その女が腕をふりあげて男に殴りかかるのだから、男は肝をつぶして、殴ろうとする自分の力をそがれてしまう<sup>⑬</sup>」。何に対しても殴り返してきたたい子は、そのうち夫をなくし生涯を一人で終えた。夫の支配に自分を任せた百合

子は、早死にした時にまだきちんと結婚していた。どうして、たい子の方がうまく行ったと感ずるのであろう。

たい子は一九五五年の「女は誰のために生きる」の中で、自分の結婚の価値を書き留めている。「男が自分のために女を生きさせているように、女も自分のために男を生きさせ、男女が平等に献身する高嶺に辿りつくことはできないにしても、そういう高嶺に辿りつくために女が一步前進することは、結局女が自分のために生きようとする努力であり自分のための生活だと言えるのだ。理想が現実したときには、人生は終わる。理想のために奮闘努力しているときに人生はある」。百合子の人生は文字通りたい子のより早く幕を閉じたが、抽象的にいつても、たぶん百合子の顕治との結婚がたい子が述べる「人生」の終わりを告げた。たい子自身は結婚において自分の理想が現実になるのを見ずじまいで、「自分のために生きようとする努力」「自分のための生活」を死ぬまで続けた。

### 結び

カロリン・ハイルブルンはバージニア・ウルフとその夫について書く。「この二人は革命的な結婚をしていたのだった。わたしは革命的な結婚を、当事者両方が生活の中心に仕事をおいていて、二人をいっしょに支えると同時に、めいめいを個々に支える微妙なバランスを見出さねばならない結婚と定義したい」。革命家だった百合子とたい子は、意識的無意識的に一生この「革命的結婚」を目指し続けていた。

ある女性は、相手を愛する「妻」と、一緒に戦う「同志」との間の「微妙なバランス」を目指した。愛情と思想、公と私を有機的に融合させようとした。ところが、当時の多くの男性は公的生活と私的生活を別々に

していた。見てきたように、多くの左翼男性は思想と女性への扱いが相矛盾しても気にもとめなかった。というよりも、妻や愛人をどう扱おうと、思想と無関係無影響だったと思っていた。男流フェミニストだった堺利彦が指摘したように、男女も資本主義者・労働者と同じように上下階級を成していた。

それなのに、左翼女性の多くは活動している男性を相手に選び、結婚を活動の一部と見なしがちだった。思想を大切にしているからこそ、同じ思想を持っている対等な夫や恋人がほしかった。結婚は思想を実現する一環だった。たい子が「最も新しい恋愛」で書いたように、「新しい時代に於いては、恋愛は、相互の闘志を鼓舞して決意を固くさせるものではない」と信じていた。

しかし、この女性たちは活動を、結婚を通してだけ実現しようと思つたわけではない。活動の一環として相手を選んだわけだから、そのまま活動をやめて従順な妻になるつもりはなかった。特に、自分の思想を作家という使命を通して表現していた百合子やたい子には、仕事と活動が一体になって、どれもやめられない。

それでも、活動を私生活の一部としてのみ解釈されてしまうこともある。例えば、たい子を菅野すがに喩えた小堀甚二は、大逆事件のすがの参加は荒畑寒村を捨てて幸徳秋水に走ったお詫びとしての自殺行為だったと主張する。ヘレン・ラデッカーは、妻千代子を捨ててすがを選んだ幸徳が自殺したと主張する人はいないと指摘する。すがだけは私生活が絡んでくる。

公私をとんでもなく混同して大満足に生きていった大杉栄はここでも例外的な存在である。思想上、大杉を他の左翼男性とまったく一緒にするわけにはいかないが、恋愛・家族・執筆・活動のために無差別な情熱を持った彼の生き方はほかではなかなか見られないパターンの一つを提



供している。

栄と伊藤野枝の関係を「理想な結婚」と呼ぶほど酔狂ではないが、その面白みの一つは子育てなど性役割の一部を柔軟にしたところではなからうか。栄は震災後殺されたときまで数年間ずっと当局に尾行される身だった。虐殺数ヶ月前に友人に書いた手紙で、尾行の巡査に小学生だった娘の魔子の放課後の迎えを頼もうと思ったと書いている。ところが、魔子がまだよく知らない新米巡査だったため、思いとどまって自分で迎えに行ったそうである。性役割、家族の私と尾行の公、敵味方をすべていとも簡単にごっちゃませにした一つの父親の子育て実践として大変興味深い逸話だと思う。

百合子は湯浅芳子との関係に性役割が柔軟になった結婚（のようなもの）を経験した。二人が別れてからすぐ、芳子は日記に書いた。「互いに助け合い、何ものかをおぎない合っつけられた間、自分たちはなかなかよい生活をしてきたのだ<sup>⑮</sup>。たい子と小堀でも、日常生活で普通の男女役割にそつても、実際仕事で、浮気で、思想で、性格では最初から最後まで平等に生きて行った。

「妻」の役を免れ、個人として、平等な関係の一方として対等な責任をもつて存在する機会を与えられて、たい子も百合子も仕事を「生活の中心」においていられたことに不思議はなからう。

## 注

- ① 「中條百合子」と「宮本百合子」との使い分けについては、池田啓悟「宮本百合子の生成——中條／宮本百合子「小祝の一家」論」（昭和文学研究第五八集、二〇〇九）を参照。
- ② 百合子「子供・子供・子供のモスクワ」一九三〇、宮本百合子全集（新日本出版社、一九七九／二〇〇〇）九・九七、九九頁。
- ③ 百合子『道標』一九五〇、全集七・二九〇～二九三頁。

- ④ 不破哲三「宮本百合子と十二年」（新日本出版社、一九八六）一〇四頁。
- ⑤ 黒澤亜里子（中川成美コメント）「咲き揃う女／母／労働者：『道標』期前後の宮本百合子テキストに見る女性表象」（立命館言語文化研究所、二〇〇四）一五～一六頁。
- ⑥ 沼沢和子「宮本百合子論」（武蔵野書房、一九九三）三五七頁。
- ⑦ 小堀甚二「小説 妖怪を見た」（角川書店、一九五九）三八頁。
- ⑧ 平林たい子「エルドラド明るし」一九三七、平林たい子全集（潮出版社、一九七九）二・三二一、三二三頁。
- ⑨ たい子「プロレタリアの星」一九三三、全集一・三八〇頁。
- ⑩ 前出「エルドラド明るし」三二三頁。
- ⑪ 山本虎三「別れた妻 平林たい子に興ふ」（婦人世界、一九三三）九二頁。
- ⑫ 葉山嘉樹・林房雄・中本たか子・平林たい子他「最近世相漫談会」（女人芸術、一九二九）一六頁。
- ⑬ 山川菊栄「無産階級運動における婦人の問題」（改造、一九二六）（鈴木裕子『山川菊栄女性解放論集』（岩波書店、一九八四）に収録）二・一五四頁。
- ⑭ 一九三九年文部省発「戦時家庭教育要項」。引用：若桑みどり『戦争がつくる女性像』（三松堂、一九九五）七一頁。
- ⑮ たい子「女の指導者」「女は誰のために生きる」一九五五、全集一・一六四頁。
- ⑯ 百合子「私たちの建設」一九四六。全集一五・八八頁。
- ⑰ 百合子「播州平野」一九四六、全集六・一二四頁。
- ⑱ 前出「私たちの建設」九四頁。
- ⑲ 壺井栄「日本の母」一九四二、壺井栄全集（文泉堂、一九九七）一・一一二頁。
- ⑳ 沼沢（一九九三）三三四頁。
- ㉑ 「お后」は山口弁でお母さんのことで、お父さんお母さんは顕治の父母を指す。書簡や日記は、特筆がなければ全集による。
- ㉒ 前出「私たちの建設」九七頁。
- ㉓ 沼沢（一九九三）三二七頁。

- ②4 池田(二〇〇九)三〇頁。
- ②5 百合子「道標」を書き終えて」一九五一、全集一三・五四四頁。
- ②6 黒澤・中川(二〇〇四)九頁。
- ②7 池田(二〇〇九)三三頁。
- ②8 池田啓悟「中條百合子「ズラかった信吉」をめぐって」(二〇〇六)七、八頁。
- ②9 たい子「こういう女」一九四六、全集三・一一四頁。
- ③0 Heilbrun, Carolyn: *Writing a Woman's Life* (Random House, 1988).  
和訳：大社淑子(みすず書房、一九九二)一六四頁。
- ③1 小堀甚二、二二五頁。
- ③2 前出「エルドラド明るし」三二七頁。
- ③3 前出「こういう女」一〇四頁。
- ③4 たい子「一人行く」一九四六、全集三・一五五頁。
- ③5 小堀甚二、八〇頁。「坂井」は小堀で、「鶴代」はたい子のこと。
- ③6 たい子「わたしは生きる」一九四七、全集三・二二六、二二八頁。
- ③7 たい子「うた日記」一九四六、全集三・四一頁。
- ③8 前出「こういう女」一〇九頁。
- ③9 たい子「砂漠の花」一九五七、全集七・四四四頁。
- ④0 たい子「喧嘩別れた夫の死」一九五九、全集二二・一六九頁。
- ④1 Le Guin, Ursula K.: *The Wave in the Mind*. (Shambhala Publications, 2004). 和訳：青木由紀子(岩波書店、二〇〇六)三九頁。
- ④2 沼沢(一九九三)三六〇頁。
- ④3 沼沢和子「宮本百合子——戦後の出発の時期の問題」(日本文学、一九七七。有精堂、一九八一に収録)二五一頁。
- ④4 若桑一〇九頁引用。
- ④5 それとも気づいた？「風知草」の重吉のあまりの悪党ぶりに百合子が気づいていなかったのか、それともひっそりと何かを訴えていたのか。知りようがあるのか、これからの研究による。また、黒澤亜里子が指摘するように「道標」は、それ自身が意図する以上にみずからを過剰に語るテクストである。「細部／何でもないこと」はつねに全体を裏切る。語り手が事態の複雑さをコントロールしきれなくなり、その混乱を露呈してしまう時、そこに現れるのは「意味のはっきりしない不愉快事」としてのある種の紛糾(トラブル)である」。(黒澤亜里子「Y・Y・カンパニー論」(翰林書房、二〇〇八)六四一頁)。
- ④6 百合子「婦人と文学」一九四七、全集二二・四一五頁。
- ④7 渡邊澄子『日本近代女性文学論——闇を拓く』(世界思想社、一九九八)二五七頁。
- ④8 壺井栄「宮本百合子を偲ぶ」一九五一、全集二二・四七七頁。
- ④9 池田二〇〇九論中。
- ⑤0 Heilbrun/大社一五、一一頁。
- ⑤1 たい子「殴る夫」「にくまれ問答」一九五九、全集二二・三四六頁。
- ⑤2 たい子「女は誰のために生きる」一九五五、全集二二・一四一頁。この言葉を顕治の筆名変更論と比較あるべし。
- ⑤3 Heilbrun/大社一〇四頁。
- ⑤4 堺利彦『婦人問題』(金尾文淵堂、一九〇七)一〇一頁。
- ⑤5 たい子「最も新しい恋愛」一九二七、全集二二・一五五頁。
- ⑤6 湯浅芳子日記、一九三二年二月二八日。引用は沢部仁美『百合子、ダスヴェーダーンヤ』(学陽書房、一九九七)二八五頁。(コリア国際学園教諭)